



# インターカルチュラル・シティ シンポジウム2024浜松

## INTERCULTURAL CITY SYMPOSIUM 2024 HAMAMATSU

開催報告書



日時

2024.10.10 (木) ~ 10.11 (金)

会場

10月10日 浜松市鴨江アートセンター

10月11日 アクトシティ浜松コンgresセンター

# 目次

|    |                                                                                 |
|----|---------------------------------------------------------------------------------|
| 02 | 挨拶                                                                              |
| 03 | インターカルチュラル・シティシンポジウム 2024 浜松                                                    |
| 04 | 1日目                                                                             |
| 04 | ■ ワークショップ<br>多文化共生ワークショップ<br>～誰もが住みやすいまちを目指し、多文化共生について知り・気づき・一緒に考える～            |
| 05 | ■ セミナー<br>多様性のある社会を日常風景に<br>～サッカーを通して築くダイバーシティ豊かな社会～                            |
| 06 | ■ インターカルチュラル・シティセミナー                                                            |
| 07 | 2日目                                                                             |
| 07 | ■ 開会                                                                            |
| 08 | ■ 記念講演<br>アフリカ少年の多文化共生の冒険                                                       |
| 09 | ■ セッション 1<br>誰もが自分らしく、生き生きとした人生を送ることができる<br>共生社会の実現に向けて<br>～今とこれからを担う世代に焦点を当てて～ |
| 11 | ■ セッション 2<br>多様で包摂的なまちづくり「スポーツ×多文化共生」<br>～多様な背景・ルーツを超え、多様な能力を生かすスポーツと地域の活性化～    |
| 13 | ■ セッション 3<br>多文化共生都市の国際連携「インターカルチュラル・シティの可能性」<br>～多様性を都市の活力、発展に繋げるための ICC 政策～   |
| 15 | 浜松宣言                                                                            |
| 17 | 閉会                                                                              |
| 18 | 浜松市とインターカルチュラル・シティ（主な歩み）                                                        |



浜松市長 中野祐介

## 主催者挨拶

「インターカルチュラル・シティシンポジウム2024 浜松」の開催にあたり、国際交流基金、インターカルチュラル・シティ・ネットワーク(ICC)並びに関係の皆様方に深く感謝申し上げます。

ICCは、2008年に欧州評議会の主導で始まった多様性を生かしたまちづくりを目指す都市政策です。現在では世界170を超える都市が参加する国際的なネットワークへと成長し、日本からは浜松市が2017年にアジア初の加盟都市となりました。

我が国には358万人を超える外国人の方々が生きており、本市でも外国人市民は約3万人に達し、その国籍・地域も多様化しています。このような状況下、2023年度からは本市の多文化共生施策の指針となる「浜松市多文化共生都市ビジョン」が第3次計画期間に移行し、外国人市民をまちづくりの重要なパートナーと捉え、誰もが活躍できる地域づくりを推進しております。

本シンポジウムでは、「スポーツ×多文化共生」や「国際連携×多文化共生」などのテーマで議論が行われ、互いの取組をさらに進めていくためのアイデアを共有しました。これは、包摂的なまちづくりを進める貴重な機会となりました。

私たちは、住民が生み出す文化的多様性や多様な能力を、都市の活力や発展、地域の活性化に繋げていく必要があります。すべての市民が互いの多様性を尊重し、活躍できる社会の実現は、グローバル化が進む現代において極めて重要な課題です。

本シンポジウムを通じて得られた新たな知見が、今後の国際的な都市間連携をさらに深め、より活力ある地域社会づくりを進めていくための重要なステップになると確信しています。

結びに、本シンポジウムの成果が、多様性を尊重し包摂的な社会を目指す全ての都市の発展に寄与することを祈念いたします。



国際交流基金理事 佐藤百合

## 共催者挨拶

インターカルチュラル・シティ シンポジウム2024 浜松の開催にあたり、主催者である浜松市をはじめ、インターカルチュラル・シティ・ネットワーク(ICC)並びに多くの皆さまのご支援とご協力を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。

本シンポジウムでは、「スポーツ×多文化共生」「国際連携×多文化共生」など、多文化共生を都市の活力へとつなげるための多様なテーマについて議論が交わされました。国内外の専門家、自治体関係者、市民の皆さまとの2日間にわたる意見交換を通じ、多文化共生社会の実現に向けた新たな視点と具体的な方策が共有され、大変有意義な対話の機会となりました。

本シンポジウムの成果として採択された「浜松宣言」は、多様な文化背景を持つ住民が相互に交流し、対話を重ねることの重要性を強調しています。私たちは、多文化共生社会の実現に向けて、互いを理解し合う機会を積極的に創出し、共に新たな文化を育み発信することが、地域の活力につながると確信しています。今回のシンポジウムで得られた多様な視点や実践事例が、これからのまちづくりにおいて貴重な指針となるよう祈念いたします。

国際交流基金は、今後も、各都市の先駆的な取り組みを発信し、多文化共生の理念をより多くの地域に根付かせるための活動を継続してまいります。本シンポジウムで得られた知見が、浜松市はもちろん、参加された各都市・地域の発展につながることを願ってやみません。

# インターカルチュラル・シティ シンポジウム2024浜松

浜松市は、静岡県内最大の人口78万7千人を有し、面積1,558平方キロメートルで日本第2位の広さを誇る都市です。東京と大阪の中間に位置し、都市部、田園地域、中山間地域など多様な環境を持つ「国土縮図型都市」として知られています。

世界的企業であるスズキやヤマハの発祥地であり、光技術や電子技術などの先端産業技術など、世界市場で高い評価を受けている企業が多数立地するものづくりがさかんな地域です。自然環境に恵まれ、うなぎ、餃子、みかんなどの食文化も豊かです。毎年5月の「浜松まつり」や3年に1度の「浜松国際ピアノコンクール」が開催されるなど、観光や音楽の面でも魅力的があふれています。

浜松市の特徴の一つとして、多様な文化的背景を持つ住民が多数居住していることが挙げられます。約3万人（人口の約4%）の外国人市民が暮らししており、従来のブラジルなど南米出身者に加え、近年はアジア系住民の増加が顕著です。

2013年3月に策定された「浜松市多文化共生都市ビジョン」は、「協働」「創造」「安心」を柱とし、多様性を生かしたまちづくりを推進しています。浜松市はアジア初かつ日本唯一のインターカルチュラル・シティ・ネットワーク（ICC）加盟都市であり、国内外の多文化共生都市との連携を強化しています。

シンポジウムは浜松市が国際交流基金との共催により2日間にわたって開催されました。1日目は多文化共生に関するワークショップと実践事例を紹介するパネルトーク、2日目は記念講演と3つのセッション（「誰もが自分らしく人生をおくることができる共生社会の実現」「スポーツ×多文化共生」「国際連携×多文化共生」）を通じて、多様化する地域社会での取り組みやアイデアを共有し、これからのまちづくりについて討議しました。

今回の2日間のシンポジウムには、9か国・地域からICC加盟都市、日本国内の自治体、研究者や市民約200人が参加しました。シンポジウムの締めくくりとして「浜松宣言」が発表され、採択されました。





# 1日目

開会にあたり、主催者である浜松市を代表して工藤文武企画調整部長が挨拶し、参加者の皆様に心から歓迎し、多文化共生に係る取組の地域や各国での事例を共有するとともに、これからの多様性を生かしたまちづくりについて考えるというサミットの目的を発言しました。

## 多文化共生ワークショップ

～誰もが住みやすいまちを目指し、多文化共生について知り・気づき・一緒に考える～



【講師】はままつ国際理解教育ネット 三田 景子 氏

開会後、「誰もが住みやすいまちを目指し、多文化共生について知り・気づき・一緒に考える」をテーマに、市民向けのワークショップを実施しました。これまで多文化共生に携わるきっかけや考える機会のなかった方々に、より理解を促進することを狙いとして、はままつ国際理解教育ネットの三田景子氏を講師にグループワークを行いました。

まず、来日して間もない外国人の視点を体験するため、翻訳アプリを使ったり、周りの人に聞いたりすることができない状況下の中、アラビア語やヒンディー語、カンボジア語など、日本人にあまりなじみのない外国語で書かれたカードの指示に従って行動するというゲームを行いました。参加者はイラストや数字などの限られた情報をもとに、カードに書いてある内容を判断し、外国人が日本でどのような気分で生活しているのかを体験しました。

その後、多様な人々が暮らしやすいまちになるためのアイデアや、地域で活躍する外国人市民の事例をもとに、外国人市民が活躍する社会となるために必要なことをテーマに、グループに分かれて議論をしました。多様な人々が暮らしやすいまちには、日本語や母語を学べる場所や多言語で必要な情報が得ることができる場所や、わかりやすいピクトグラムがあるユニバーサルデザインが浸透しているなどのアイデアが出ました。

このワークショップは、静岡文化芸術大学の佐伯康考准教授のゼミ生の協力のもと行われました。次代の多文化共生を担う大学生を中心として、誰もが住みやすいまちづくりについて活発な議論が行われました。



## セミナー

多様性のある社会を日常風景に ～サッカーを通して築くダイバーシティ豊かな社会～



左から:

【モデレーター】 静岡文化芸術大学文化政策学部准教授 佐伯 康考 氏  
【パネリスト】 多文化SHIZUカップ実行委員長 木下 英洋 氏  
多文化SHIZUカップ実行委員 アルバレス・アントニ 氏  
多文化SHIZUカップ実行委員 渡邊 カルロス 氏  
多文化SHIZUカップ実行委員 ドアン・ソン・トゥン 氏

今回のシンポジウムの主テーマであるインターカルチュラル政策の4原則のひとつに「インターアクション(相互交流)」があります。

そうした実践事例として、地域での多様性を生かした取組である「多文化SHIZUカップ」の紹介を通じて、異なる文化を持つ市民が理解し合い、ギャップを埋め、団結し、同じゴールに向かうとともに、市民の積極的な交流や多文化共生の意識醸成の促進を図りました。

「多文化SHIZUカップ」は、サッカーを通して静岡県内の多文化共生をはじめ多様性ある社会の実現を推進し、誰もが暮らしやすい社会を地域住民と共に共創することを目的としたサッカーイベントです。2022年10月に第1回が開催され、2024年10月までに開催回数は5回を数えます。実行委員会が日本人だけでなく、ベトナム、ペルーという複数の国籍で構成されていることが特徴です。

セミナーはモデレーターを務める佐伯康考氏からの趣旨説明を経て、パネリストの方々の自己紹介からスタートしました。パネリストの方々は「多文化SHIZUカップ」の実行委員会の活動だけではなく、多文化共生社会の実現に向けて外国人コミュニティなどに対する支援や、日本人との交流活動を推進していることを紹介しました。

実行委員長を務める木下英洋氏から、「多文化SHIZUカップ」の開催目的や、これまでの活動履歴などについて、写真を交えて紹介がありました。8人制ミニコートのサッカー大会だけでなく、子どもサッカー教室や体験、世界の食文化や舞踊などの文化体験、アンブティーサッカー体験なども併催し、サッカー競技の参加者以外にも様々な国の文化に触れ、集まる人々がお互いを知り、そして交流するきっかけとなるイベントであると説明がありました。

「多文化SHIZUカップ」は、普段交流することが少ないコミュニティー同士、そして普段国際交流企画に参加しない層が、スポーツという共通言語を通じ、言語という垣根を越えてつながることができる相互交流の場となっています。

今回のセミナーを通じて、包摂的なまちづくりを進めるため、多文化共生の理解促進やグッドプラクティスを参加者と共有することができました。

## インターカルチュラル・シティセミナー

ワークショップ、セミナーの別会場では、インターカルチュラル・シティセミナーを開催しました。

セミナーでは、世界の多文化共生の新潮流であるインターカルチュラル・シティプログラム(ICC)について理解を深めました。カナダ、ポーランド、韓国、日本のICC加盟自治体職員等、学識経験者、都市政策専門家が登壇しました。

ボブ・ホワイト氏は、カナダのICC加盟都市であるモントリオール市やケベック州の都市間ネットワークについて紹介しました。ケベック州のネットワークは2015年に設立され、20都市が参加しています。都市間ネットワークの利点として、単独では困難な取り組みも複数自治体との連携で実現可能性が広がることが挙げられました。ICC加盟の利点には、都市のブランディングや施策の可視化、グッドプラクティスの共有などがあります。

ポーランド・ブロツワフ市のヤクブ・マズル副市長は、ポーランドから3都市がICCに加盟していることを報告しました。加盟のメリットとして、専門家によるサポートやグッドプラクティスの共有が挙げられました。また、ICCの支援を受け、プレイスメイキング都市プログラムに参加し、持続可能な都市創造のアプローチを学んでいることが報告されました。

韓国のオ・ジョンウン准教授は、韓国から2都市がICCに加盟していることを報告しました。韓国国内では2012年に全国多文化都市協議会が設立され、外国人住民が1万人以上の基礎自治体が会員となっています。会員都市間の連携、情報共有、多文化共生施策の提案などが行われています。

日本唯一の加盟自治体である浜松市からは、国内の都市間ネットワークとして外国人集住都市会議と政令指定都市市長会の取り組みが紹介されました。浜松市は2017年にアジアで初めてICCネットワークに加盟し、国際会議の開催等により連携を深めています。

セミナーでは、都市間連携によるネットワーク構築の重要性が強調されました。共通課題への取り組み推進、知見やノウハウの共有、国際社会への訴求力の強いメッセージ発信など、大きな可能性を持つものとされています。一方で、ネットワークの維持・運営には課題もあり、メリットをより明確に見出すことが鍵になるとの意見も出されました。

このセミナーを通じて、ICCの取り組みや都市間ネットワークの重要性について、国際的な視点から理解を深めることができました。多文化共生社会の実現に向けて、今後も国内外の都市との連携を強化し、知見を共有していくことの重要性が再確認されました。



- 【講演者】 都市政策専門家(カナダ・モントリオール大学教授) ボブ・ホワイト 氏  
【パネリスト】 ポーランド・ブロツワフ市 ヤクブ・マズル 副市長  
韓国・漢城大学准教授 オ・ジョンウン 氏  
浜松市企画調整部国際課 松井 由和 課長  
【モデレーター】 明治大学国際日本学部教授 山脇 啓造 氏  
【コメンテーター】 都留文科大学教養学部比較文化学科専任講師 上野 貴彦 氏



## 2日目



主催者挨拶:中野祐介 浜松市長

2日目は中野祐介浜松市長の挨拶により開会しました。中野市長は、浜松市が国内有数の外国人集住都市として3万人の外国人市民と共に暮らしていること、2001年に外国人集住都市会議を提唱し、国内の多文化共生をリードしてきたことや、2017年10月にアジア初のインターカルチュラル・シティ・ネットワークに加盟したことを紹介しました。

本シンポジウムでは、日本、韓国、ポーランド、カナダの多文化共生の第一線で活躍する都市関係者が一堂に会し、多様性を生かしたまちづくりについて議論することを説明しました。

最後に、このシンポジウムを通じて、多様化する地域社会がより活力に溢れ、安心して暮らせるよう、国境や立場を越えた連携が強化されることへの期待を表明しました。



共催者挨拶:佐藤百合 国際交流基金理事

佐藤百合国際交流基金理事は、国際交流基金が1972年の創立以来、「文化」「言語」「対話」の分野で国際文化交流を推進してきたことを紹介しました。多文化共生については、2009年から欧州評議会の「インターカルチュラル・シティ」プログラムと連携し、浜松市の協力のもと、各都市の先駆的事例を共有してきたと述べました。

本シンポジウムでは、3つのテーマでトークセッションを行い、外国にルーツを持つ若者の自己実現や、地域住民がルーツの違いを超えて市民性を育む取り組みなどについて議論することを説明しました。また、「地球市民賞」を通じて多文化共生を目指す団体を支援していることや、2022年度受賞団体からの登壇者があることを紹介しました。

最後に、開催協力者への感謝を述べ、参加者がシンポジウムを通じて多文化共生社会をより身近に感じることへの期待を表明しました。





## リタ・マラスカルキ

### インターカルチュラル・インクルージョン担当課長からのビデオメッセージ



インターカルチュラル・シティ・ネットワークを主導する欧州評議会 リタ・マラスカルキ インターカルチュラル・インクルージョン担当課長からビデオメッセージが届きました。

インターカルチュラル・シティプログラムは、世界中の都市と協力して多文化共生社会の促進に取り組んでおり、平等、多様性、相互交流、参加の4原則に基づいています。都市環境における効率的なダイバーシティ・マネジメントの重要性を強調し、研究ツール、政策支援、戦略的助言、能力開発援助を提供しています。

浜松市は2017年に日本で初めてこのプログラムに参加し、知識やグッドプラクティスの交換を通じてネットワーク全体に貢献しています。

本シンポジウムがインターカルチュラル・アプローチへの理解を深め、より包括的な社会構築への取り組みを強化する機会となることを期待すると述べました。

### 漫画家・タレントである星野ルネ氏は記念講演の中で、自身の生き立ちの話を踏まえて多文化共生について話しました。

星野ルネ氏は、4歳の時にカメルーンから来日し、兵庫県姫路市で育ちました。記念講演では、星野氏の漫画を通して、カメルーンと日本という二つの文化の違いや、そこから生じる誤解や先入観をユーモアたっぷりにご紹介されました。

日本の小学校での運動会やアルバイトの面接など星野氏自身の経験を基にしたエピソードを通し、日本人が当たり前と思っている習慣や考え方について、カメルーン出身である星野氏の視点から語られました。自身の経験を通じて日本社会における多様性と異文化理解の重要性を語られました。

星野氏は、日本の歴史や文化に親しみながらも、自身のアイデンティティに葛藤を感じたそうです。しかし、成長とともに日本とカメルーン両方の文化を持つ自分のユニークさを受け入れるようになったと話しました。

文化とは特定のものではなく、その時代に生きる人々の営みそのものであると述べ、自身の漫画も将来の日本文化の一部になり得るとの考えをお話されました。多様な背景を持つ人々が共生する社会の実現に向けて、この漫画が一助となることを願っていると講演を締めくくりました。



## セッション1

誰もが自分らしく、生き生きとした人生を送ることができる共生社会の実現に向けて  
～今とこれからを担う世代に焦点を当てて～



左から:

【モデレーター】 国際交流基金日本語国際センター所長 佐藤 郡衛 氏

【コメンテーター】 漫画家・タレント 星野 ルネ 氏

【パネリスト】 NPO法人フィリピンナガイサ代表理事 松本 義一 氏  
COLORS 相川 ヌビア 氏  
NPO法人アレッセ高岡理事長 青木 由香 氏

「誰もが自分らしく、生き生きとした人生を送ることができる共生社会の実現に向けて」と題した本セッションでは、外国にルーツを持つ若い世代のキャリア形成と自己実現に焦点を当て、必要な支援のあり方などについて議論を展開しました。外国にルーツのある若い世代(第2世代、第3世代)が増加する中、一人ひとりが希望をもってキャリア形成・自己実現できる共生社会の実現に向け、当事者・支援団体それぞれの立場から知見を持ち寄り、対話を通してその手掛かりを探りました。

始めに、モデレーターの佐藤郡衛氏が論点を説明しました。セッションの背景には2つの課題があります。1つ目は地域における多文化共生の実質化の必要性です。地域内に多文化的な状況を作り、住民の多文化への意識を高めることが重要です。2つ目は、外国にルーツを持つ若い世代が生産年齢に達し始

めていることです。彼らが夢と希望を持って生きられているか、という問題意識があります。希望は与えられるものではなく作っていくものであり、このセッションでは若い世代が希望を作っていくために必要なことを探っていききたいと語りました。

外国ルーツの若い世代を取り巻く課題として、学校に行けない、高校を中退する、非正規の単純労働に就くなどの事例が挙げられました。彼らの「ルーツ」だけでなく、現在に至るまでの「ルート」を理解することが重要だと指摘されています。信頼できる他者とともに「ルート」を築くことで、自立して希望を作っていくことができるとの見解が示されました。若い世代が夢と希望をもって生きていくためには何が必要か考えていく上で、以下の3点に焦点を当て、登壇者それぞれの視点から議論を展開しました。

1. この課題を個人の力・頑張りには還元するのではなく、地域社会の仕組みそのものを問うこと
2. 社会的な資源の創出と公正な配分(学校内外の学習支援サービス、居場所づくりなど)
3. ライフコース、トランスナショナルな視点からのキャリア形成・自己実現

当事者の視点として、静岡県浜松市出身の相川ヌビア氏が自身の経験を共有しました。ブラジル人学校から日本の公立学校への転校、言語や文化の壁の克服、大学進学への挑戦、そしてブラジルへの留学を通じたアイデンティティの再確認など、多くの困難を乗り越えてきた過程が語られました。相川氏は、外国にルーツを持つことを強みと捉え、自身のバックグラウンドを知ることの重要性を強調しました。また、多くの人々の支援があって今の自分があることを認識し、今度は自分が外国にルーツを持つ人々の力になりたいと述べ、多文化共生社会の実現に向けて、若い世代が自身のアイデンティティに自信を持ち、それを強みとして生かせるような環境づくりの必要性を訴えました。

次に、支援のための社会的資源の創出について、特定非営利活動法人フィリピンナガイサの代表理事松本義一氏が団体の取り組みを紹介しました。「自立・共生社会の実現」を目指し、移住者への教育支援、地域コミュニティ創造、人材育成を行っています。団体の特徴的な取り組みとして、「多様性を力に変える」という観点から、元生徒がサポーター(教える側)になる仕組みを導入しています。これにより、ロールモデルの身近な存在、生徒の自信向上、団体全体の活性化などの効果が見られました。松本氏は、この取り組みが地域社会における多様性の活用

につながると考え、外国人の活躍を促進するためにはこのような視点が重要だと強調しました。団体は今後もこの方針を継続し、ポジティブな社会変化を目指すとしています。

青木由香氏は、浜松市以外の地域における共生社会を実現するための取り組みとして、自身が代表を務める高岡市を拠点とするNPO法人アレッセ高岡の活動について説明しました。同団体は人材育成と地域啓発を目的とし、学習支援、多言語教育情報支援、市民性教育の3事業を展開しています。富山県では外国人住民、特に子どもの数が増加傾向にありますが、外国人集住都市の浜松市と違い、外国人住民が各地域に散在して生活する状況にあることから、集住地域のような支援システムが整えられず、散在する子どもたちに対する支援が十分でない現状があります。青木氏は、外国人住民のみならず、すべての地域住民を巻き込みながら市民性を育む「市民性教育」を重視し、外国ルーツの若者たちによるプロジェクトチームを立ち上げ、教育ニーズの調査と提言活動を行いました。今後は、外国ルーツの青少年がリーダーとなって地域課題の解決に取り組み、多様な人々が共に新しい文化と地域を築いていくことを目指しています。

このセッションを通じて、外国にルーツを持つ若い世代が自身のアイデンティティに自信を持ち、それを強みとして生かせる環境づくりの重要性が浮き彫りになりました。また、多様性を力に変え、ルーツや立場の違いを超え地域社会全体で外国人の活躍を促進する視点の必要性も強調されました。今後は、これらの知見を基に、より包括的で実効性のある施策の展開が期待されます。





## セッション2

多様で包摂的なまちづくり「スポーツ×多文化共生」  
～多様な背景・ルーツを超え、多様な能力を生かすスポーツと地域の活性化～



左から:

下段【パネリスト】 プレス浜松選手 アンドラデ・レイレイニ氏、畠山 初音氏  
中段【モデレーター】 都留文科大学教養学部比較文化学科専任講師 上野 貴彦氏  
【パネリスト】 在日ベトナムサッカー協会全権代理 ゲン・ボ・フェン・ユーン氏  
【コメンテーター】 都市政策専門家(カナダ・モントリオール大学教授) ポブ・ホワイト氏  
上段【パネリスト】 三遠ネオフェニックス SAN-ENアンバサダー 鹿毛 誠一郎氏

本セッションでは、選手や選手を支えるチームスタッフなど、さまざまな立場からの実体験を交えて、「スポーツ×多文化共生」を通じた多様で包摂的なまちづくり、そして地域の活性化について議論しました。

ゲン・ボ・フェン・ユーン氏は、サッカーベトナムナショナルチームの支援者として、2018年から始まったベトナムサッカー代表チームの日本での強化合宿における調整役として、選手やコーチ陣のための宿泊施設の手配、現地でのサポートスタッフの調整、そして練習環境やトレーニング場所の確保を担当し、日本とベトナムの文化的な違いを考慮しながら対応する難しさを発表しました。

例えば、日本のスタッフはスケジュール通りに進めることを重視する一方、ベトナム側は状況に応じて開始や終了時間を柔軟に変更するため、文化の違いを前提に、相互理解を深めるためにコミュニケーションを密に取り、双方が歩み寄る努力が必要でした。この相互理解がスムーズな協力関係を築く鍵であると述べました。

また、合宿の期間中、地元のサッカー愛好家や子供たちとの交流イベントを実施し、選手たちと地域住民が直接触れ合う場を提供し、強化合宿というトレーニングを超え、スポーツを通じた両国間の相互理解や友情の構築に大きく寄与したと発表しました。

この合宿の成功により、浜松市とベトナムサッカー連盟との関係もさらに深まり、今後も継続的な交流が期待され、地域住民や学生たちにとっても、国際的なスポーツ選手と直接触れ合うことで、異文化理解が促進されただけでなく、サッカーを通じた夢や目標を再確認する機会となりました。このように、スポーツを通じて地域と国際社会をつなぐ活動は、今後も重要な役割を果たすと確信していると締めくくりました。





鹿毛誠一郎氏は、三遠ネオフェニックスのチームスタッフとして、選手ひとりひとりが高いパフォーマンスを発揮できるよう、ルーツが異なる人々が互いを認め合い対等な関係を築くために心がけていることや、選手が持つ多様な能力を生かし高め合うために必要なことなどを発表しました。

生活様式や習慣の違いにより、外国籍選手とのコミュニケーションに戸惑うケースがありますが、毎日の挨拶や声掛けを継続することで信頼関係の構築につながり、それがとても大切であると体験から語られました。信頼関係が築かれていくと、選手が困り事や悩み事を相談してくれるようになったり、お互いに譲れない点について話し合えるようになってくると述べられました。

また、多様な能力を生かし高め合うためには、まずは組織が何の為に存在しているのかという認識をお互いで共有していくことの重要性を述べました。組織のビジョンの共有や共通の目標設定、そして関係者それぞれの役割を明確化することにより、多様なルーツを持つ選手はじめチームスタッフ全員が共通の目標に向けて、各々が持つ能力を発揮する環境が整い、組織として充実していくと述べました。

最後に、三遠ネオフェニックスが「三遠地域を笑顔で活力ある街に!」という経営理念及び「100年さきの笑顔のために」という企業理念のもとに実施している、子供たちにスポーツの楽しさを伝え地域の未来に繋げるための小中学校や幼稚園への学校訪問や職業講話など、地域と連携した地域の活性化につながる様々な活動を紹介し、発表を締めくくりました。

アンドラデ レイレライニ氏はプレス浜松の選手として、そして自身も外国にルーツにあるスポーツ選手であるという当事者の視点から、ルーツが異なる人々が互いを認め合い対等な関係を築くために心がけていることや、多様な能力を生かし高め合うために必要なことなどを発表しました。

多様な能力を生かし高め合うためには、異なる考え方や価値が存在することを認め合い、尊重することが何より大切だと述べました。特にスポーツにおいては、国籍やルーツは関係なく、スポーツマンシップを持ち、プレーヤー同士がお互い尊敬することが大切であり、それはスポーツに限らず、どんな場面でも同じことがいえるのではないかと考えを示しました。

また、ケガの影響で試合に出場できないことがあった際、自分にできることは、チームを盛り上げ、サポートをすることであると考え、大きな声でチームメンバーを応援したという自身のエピソードを語りました。スポーツでは声かけが重要であり、声を出すことで士気が高まり、チームが1つになる瞬間があると述べました。

最後に、プレス浜松と静岡県西部8市町との連携協定を通じ、母校の小学校や中学校への訪問した際、子供たちの歓迎や応援が選手だけでなく、チームにとっても大きな力となり、チームと地域全体が一緒に盛り上がっていくことを信じていますと締めくくりました。

## セッション3

### 多文化共生都市の国際連携「インターカルチュラル・シティの可能性」 ～多様性を都市の活力、発展に繋げるためのICC政策～



左から:

【モデレーター】 明治大学国際日本学部教授 山脇 啓造 氏

【コメンテーター】 都市政策専門家(カナダ・モントリオール大学教授) ボブ・ホワイト 氏

【パネリスト】 浜松市 中野 祐介 市長

ポーランド・ヴロツワフ市 ヤクブ・マズル 副市長

韓国・安山市 イ・ミングン 市長

日本では在留外国人数が2023年末時点で340万人超と過去最高を更新し、浜松市においても外国人市民数が約3万人と増加しており、住民の多国籍化が進んでいます。本セッションでは、今後ますます多様化していく地域社会がより多様な活力に溢れ、地域の発展、活性化を進めていくための政策には何が必要となるのか、ICC加盟都市の国際連携の視点も交えて議論しました。

中野市長は、浜松市の取り組みについて発表をしました。

浜松市は、人口約78万7千人、面積1,558平方キロメートルの日本第2位の広さを持つ都市で、世界的なものづくり企業の発祥地であり、豊かな自然環境や食文化、観光資源を有しています。

浜松市の多文化共生施策の指針として、2013年に策定され、2度改定された「浜松市多文化共生都市ビジョン」を紹介しました。このビジョンでは、「協働」「創造」「安心」を施策体系の柱として、様々な取り組みを行っています。

下記に挙げる具体的な取組を説明しました。

「協働」 分野:相互交流イベントの開催、  
多文化共生活動表彰制度の設置

「創造」 分野:外国人の子どもの不就学ゼロ作戦  
事業、外国人材活躍宣言事業所認定制度

「安心」 分野:浜松市外国人学習支援センターでの  
日本語教育推進

また、国内外の多文化共生都市との連携にも注力しており、外国人集住都市会議の設立や、指定都市市長会での「外国人材の受入れ・共生社会実現プロジェクト」のリーダーシップ、欧州評議会のインターカルチュラル・シティ・ネットワークへの加盟などを行っています。

今後の課題として、多様性を地域活性化の強みとして活用すること、多様な文化背景を持つ住民間の相互交流や対話の機会を充実させること、多文化共生を浜松市の特長として国内外の多文化共生都市との連携を強化することを挙げました。

中野市長は、これらの取り組みを通じて、「誰もが活躍できる多文化共生都市・浜松」の実現を目指すとして締めくくりました。

ヤクブ・マズル副市長は、ヴロツワフ市の取り組みについて発表をしました。

ヴロツワフ市は、ポーランド南西部に位置する面積293平方キロメートル、人口約84万人の第3の都市です。特筆すべきは、ウクライナ人が人口の約28%を占めていることです。10万5千人の学生を抱える大学都市でもあり、2016年には欧州文化首都に選ばれました。

経済面では、IT産業を中心に多様な産業が発展し、ポーランドのスタートアップ市場のリーダーとして知られています。2021年の一人当たりGDPはポーランド第4位、失業率は1.6%と低く、安定した経済成長を遂げています。

1000年にわたる多文化の歴史を持つヴロツワフ市は、現在も多様性と包摂性を重視した取り組みを積極的に進めています。2022年のウクライナ戦争後、多くの難民を受け入れ、教育機関の受け入れ体制強化や、市長直属の全権大使任命、WroMigrantセンターでの多言語情報提供など、様々な施策を実施しています。

国際的には、ECCAR、ICORN、ICCなどの国際ネットワークに加盟し、他都市との経験やベストプラクティスの共有を行っています。風評被害対策プログラムや若者大使プログラム、プレイスメイキング都市プログラムなど、特筆すべき取り組みも実施しています。

しかし、急速な人口増加に伴う課題も多く、質の高い都市サービスの提供や教育制度の適応、統合活動の規制、資金不足などに直面しています。これらの課題に対し、国際的な協力を通じて解決策を模索し、多様性を尊重した持続可能な都市づくりを目指していると締めくくりました。

イ・ミングン安山市長は、安山市の取り組みについて発表をしました。

安山市は、韓国西海岸に位置する人口72万人の都市で、外国人市民が13.5%(9万8千人)を占め、韓国自治体で最高の割合となっています。

2005年から積極的な外国人政策を展開し、2009年に「外国人市民人権条例」を制定、2012年に「全国多文化都市協議会」の発足を主導、2020年に「インターカルチュラル・シティ」に加盟しました。

特筆すべき取り組みとして、外国人市民が84%を占める「多文化共生特別地区」があります。ここでは、「外国人市民支援課」を中心に、韓国語学習支援、異文化理解プログラム、医療サービスなど、包括的なサポートを提供しています。また、24言語の本を備えた「多文化小型図書館」や、14言語で相談可能な「外国人市民カウンセリング支援センター」も設置しています。

外国人市民の声を反映するため、「外国人市民委員会」や「外国人市民モニタリングチーム」を設置し、地域社会への参加を促進しています。さらに、差別と偏見をなくすための異文化理解プログラムや、文化・スポーツイベントを通じた交流促進にも力を入れています。

今後の展望として、多文化交流学校や市立国際学校の創設、経済自由区域の指定による国際的な産業拠点化を計画しています。

安山市は、外国人市民を地域社会の重要な一員として捉え、韓国市民と外国人市民が共に栄える持続可能な社会の実現を目指していると締めくくりました。





## 浜松宣言

浜松市の中野祐介市長が、インターカルチュラル・シティ シンポジウム2024浜松の成果として「浜松宣言」を発表し、参加者の賛同を得て採択されました。



## インターカルチュラル・シティシンポジウム 2024浜松「浜松宣言」

2024年10月11日

本日私たちは、浜松市において一堂に会し、多様性を生かしたまちづくりを一層推進するため、次世代の育成・支援、スポーツを通じた多様なルーツを持つ人々の交流、多文化共生都市の国際連携について活発な意見交換を行った。

私たちは、シンポジウムでの議論を共有するとともに、インターカルチュラル・シティの可能性を広く発信するため、以下のとおり宣言する。

1. 多様性のある社会が日常風景となるよう、インターカルチュラル・シティの理念を住民と共有するとともに、具体的な実践プランにつなげていく。
2. 多様な文化背景を持つ住民の相互交流や対話を促進し、同じ地域社会の構成員としての認識を高めるとともに、新たな文化を創造・発信し、地域の活性化へとつなげる。
3. 多文化共生を都市の強みや特長として積極的に捉え、グッドプラクティスを広く共有し、誰もが活躍できる魅力あふれるまちを目指す。

結びに、私たちは、これからもグローバルな枠組みで知見や経験を共有し、インターカルチュラル・シティの国際連携を一層推進する。

## 閉会

浜松市を代表して工藤文武企画調整部長が閉会の挨拶を述べました。

本シンポジウムの閉会にあたり、多数の参加者への深い感謝の意が表明されました。2日間にわたるプログラムを通じて、国内外の都市、関係団体、関係者から得られた貴重な知見と経験を、本市の多文化共生施策のさらなる充実に取り組んでいきたいと述べました。

また、欧州評議会との連携を継続し、世界の多文化共生施策の潮流であるインターカルチュラル・シティプログラムにおける先進的な取り組みを参考にし、国内をリードして多様性を生かしたまちづくりを進めていくことを述べました。

最後に、シンポジウムが盛会のうちに無事終了したことへの謝意を述べ締めくくりました。



工藤文武 浜松市企画調整部長

## インターカルチュラル・シティ・プログラムとは

外国人住民などそれぞれの背景を持つ市民の多様性を好機と捉え、まちの活力や革新、創造、成長の源泉とする都市政策「インターカルチュラル・シティ」という考え方が注目されています。2008年から欧州評議会が主導して「インターカルチュラル・シティ・プログラム(ICC)」が推進されており、欧州を中心に170以上の都市が加盟しています。

インターカルチュラル・シティ・プログラムは、都市や地域がこの目標を達成できるよう、研究ツール、政策支援、戦略的助言、能力開発援助を行っています。インターカルチュラル・シティ・プログラムは、平等、多様性、相互交流、そして参加という4つの原則に基づいています。



## 浜松市とインターカルチュラル・シティ(主な歩み)

---

2012年1月 「多文化共生都市国際シンポジウム(東京)」参加

---

2012年10月 「日韓欧多文化共生都市サミット2012浜松」開催

---

2013年10月 「日韓欧多文化共生都市シンポジウム2013安山サミット」参加

---

2016年11月 「世界民主主義フォーラム2016(フランス)」参加

---

2017年10月 「インターカルチュラル・シティと多様性を生かしたまちづくり2017浜松」開催、  
アジアの都市としてインターカルチュラル・シティ・ネットワークに初加盟

---

2017年11月 「インターカルチュラル・シティ10周年記念事業セミナー(ポルトガル)」参加

---

2018年3月 国内自治体向け「インターカルチュラル・シティに関する勉強会(東京)」開催

---

2018年12月 「インターカルチュラル・シティセミナー(東京)」開催

---

2019年10月 「都市間連携国際サミット2019浜松」開催

---

2021年3月 「日本の欧州評議会オブザーバー加盟25周年記念事業」オンラインセミナー参加  
●「インターカルチュラル・シティと日本」  
●「インターカルチュラル・シティ～アジア太平洋からの発信」

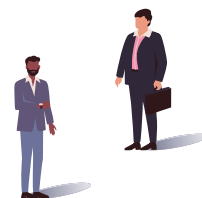
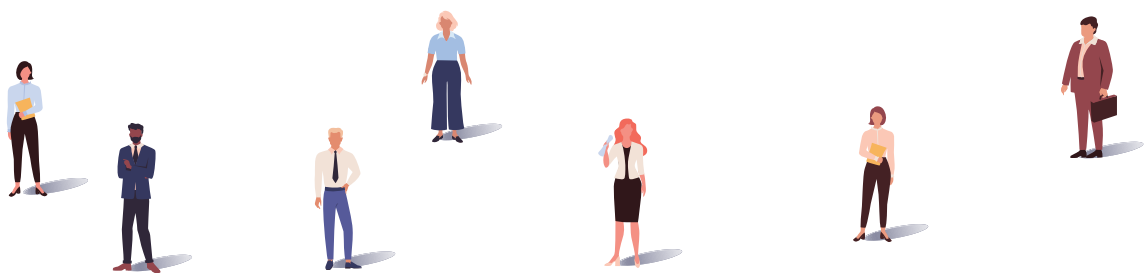
---

2022年11月 「ICCコーディネーター会議サイドイベント(イタリア)」オンライン参加

---

2024年10月 「インターカルチュラル・シティシンポジウム2024浜松」開催

---



発行

浜松市  
〒430-8652 浜松市中央区元城町103-2

発行年月

2025年2月